

『破戒』の主人公、丑松の人間像の構成

趙 昕

一

『破戒』は、日本近代文学の画期的作品といわれている。それだけに、作品に関する研究は驚くほど数多くあり、いまになって再論議する余地はほとんどないようである。それなのに、今回あえて『破戒』論とでもいうものを書くとしたのは、一留学生の立場から日本の近代文学を理解しようとの思いがあったからである。

『破戒』は被差別部落民出身の知識青年の悩みを描いた作品であるが、それについて、かつて平野謙氏はその論文『破戒』論(『学芸』昭和十三年十一月号)に於いて、藤村自身にあった「憂勃とした精神」と部落民出身の知的青年の苦悩とが結びついたところに、丑松とい

う人物が生れたと指摘したうえ、「その人間典型を中心にして……第一には特殊な人間群に対する社会的偏見を一個『新しい悲劇』にまで浮びあがらせると同時に、第二に西欧近代文学の主潮と思われた『新しき個人』の知性と感性との相剋、その『自意識』上の葛藤をそこに絡みあわせること、このふたつの契機を統合したところに『破戒』は産まれたのである」と述べている。この平野氏の見解は『破戒』評論史上あまりにも有名で、多くの論評がそれを援用し、その観点を発展させている。ここで改めてそれに関して何かを言おうとのつもりはないが、この『破戒』論から私が何よりも感銘を受けたのは、作者と人物との内的結びつきを認めながらも、一部の評者のように安易に丑松の悩みを単なる藤村のそれである

と規定し、したがって『破戒』の自伝的傾向を過大評価しようとの立場を取らず、人物の典型性と作品の普遍的意義を強く主張する、という平野氏の姿勢である。もっとも部落民蔑視問題は、近代日本が成立つ過程になお温存されていた因習の一つであり、明治になってからそれに対する反抗や批判が次第に激しいものとなったのも、近代民主主義の目ざめによって差別の非合理性が人々に認知され始めるようになったからである。藤村が差別問題を『破戒』に取り上げた本当の意図が何であろうか、また丑松の差別に対する批判的精神がどこまで表われているのだろうか（これらについて後に述べる）にかかわらず、結果的には部落民蔑視問題を『破戒』が人間尊敬、人間平等という普遍的立場から基本的に正確に捉え、そのうえで丑松の悲しみを描いた点に於いては、すでに歴史的、社会的価値があると思われる。

一方、藤村が自分自身に秘められた苦悩を丑松に託したという考え方が多くの論評に見られるが、その考えからさらに進んだところに、『破戒』がもっぱら藤村の自我表現のために書かれ、丑松という人物も藤村個人に限ってその意義がある、という判断を示す評者がいる。⁽¹⁾

確かに、丑松の悩みはそれに対する藤村の共感なしにありえないし、『破戒』発表後の藤村の自伝小説への転向ということや『春』、『家』などの作品に基づいて見る場合、丑松に藤村の影が濃く落されていることは一層鮮明に感じられてくる。しかしそれにしても『時代一般』というものを『破戒』の本質から完全に排除するのは不適切であると思う。なぜなら、藤村も明治知識人の一人である。『春』や『家』、又いくつかの藤村評伝に見られるように、彼が人生の道を切り開こうとする時に抱えつけていた不安と苦悩には、彼の独特の経歴が語られていると同時に、彼が属した、明治という時代を生きる一つの人間群の共通点を見出すこともできる。藤村のものに限らない。『浮雲』、『舞姫』といった作品に四迷、鷗外一個人の苦悩が書かれているだけでなく、時代に結びついた近代知識人の人間像が刻み込まれていることは多く論じられてきているし、その人間像をわれわれは例えば北村透谷の生涯にしぼって考える場合、もっとも特徴的なもの——個人の生活の願望、個性の伸長が歴史的条件の制約のために抑圧され、つぶされ、あるいは変形される、——そういうものを掴むことができる。即ち『浮

雲』や『舞姫』に於いても、透谷のような生涯を眺めても、その一つ一つの悲劇は藤村の悲しい経験と根本的につながるものがあり、それこそは丑松の人間像の成立する基盤である。こういう点から見ると、丑松の苦悩は『破戒』が完成する前の段階で実在した部落知識青年のそれであれ藤村のそれであれ、または両者の統一体であれ、それは一旦文学的に創造された以上、すでに誰という特定の人間に属するものでなく、時代と環境と、そこに活動するある人間群の共通するものを示すものとしてその意味を考えるべきであろう。

さて、丑松の人間像は『破戒』に於いてどう構成されているのだろうか。

部落民蔑視に対して丑松は人間の平等と尊厳を主張する。しかし旧弊な感情意識や因習が民衆の間にお広く根強く温存されているため、彼は自分の主張が世間に通じないと思つてそれを自分の内面に抑え込んで苦しむ。こういう丑松と民衆との間のギャップは『破戒』では教育、知識の有無に根源があるように表現されている。部落民を含む大多数の人は無教育、無智であるため、人間の平等と尊厳がどういふものか全く知らない。それに対

し丑松は教育を受け、新しい知識を身につけたからこそ、差別の非合理性を認知したのである。このギャップの両側にあるものは互いに理解することができず、また理解しようともせず、それに加え民衆に対し丑松のような者はごく少数であるため、彼は目ざめるのにつれてかえって孤独な存在とならざるを得ないのである。

しかし丑松の苦悩と孤独は単に民衆との認識の格差にだけ生じたものではない。彼は部落民であると同時に一小学校教員でもある。彼が奉職している飯山小学校の校長や郡視学は、規則や上の命令に絶対服従の形で教育を行うべきとの理念をもち、この理念は、小学校だけでなく教育界全体を支配するものとして捉えられている。すでに明治二十年代に憲法や教育勅語が發布されており、それ以来、支配と服従を重んじ、自我を重圧するという天皇制国家、明治政府の支配体制が急速に整えられてきたことを考えると、校長らの人間像は明治政府、国家体制の性格の文学上の表われであると言つてよからう。このような背景の中で、丑松が「異分子」として排斥される一方、自分自身も常に束縛を感じて悩んだあげく、とうとう辞職してしまふ(辞職は単に身分の問題に原因が

あるのではないことは後に述べる) というのは、個人の精神の自由を大事にしようとする知識人が強権的国家体制に同調しようとしなかったこと、またそれに歓迎されなかった脱落者であることを示したものと考えられる。

このように、一方では丑松と民衆との隔たりがあり、他方に於いては丑松と校長らとの対立がある。こういう構図から私はつぎのように考えたいと思う。近代国家が強硬に打ち立てようとする過程の中に歪んだ形で形成された国家体制と、急激な社会的変化、意識変革についていくことができないでいた民衆との間に於いて、近代的意識にいち早く目ざめた知識人がいかに不遇と孤独を感じて苦しむのが、丑松の人間像に典型化されている。その典型は一つの人間群の歴史的な性格、その積極的面と欠落したものを示したと同時に、時代と環境との一斑も擲んでいるので、そこに『破戒』の歴史的、社会的意義があると考えるのである。以下この問題をめぐって意見を述べて見たい。

(1) このような主張をするものには、例えば佐藤春夫の「藤村の『破戒』について」、和田謹吾の「『破戒』の史的「位置」」などがある。

(2) 知識人の定義を、本稿では文学者、芸術者、学者、教師など主に知的、精神的活動を行うものとする。

二

『破戒』第十九章第七節に、極度の悲しみと絶望に陥った丑松に関して次の描写がある。

其時になつて、丑松は後悔した。何故、自分は学問して、正しいことと自由なことを慕ふやうな、其様思想を持つたのだらう。同じ人間だといふことを知らなかつたなら、甘んじて世の輕蔑を受けても居られたらうものを。何故、自分は人らしいものに斯の世の中へ生れて来たのだらう。野山を駆け歩く獣の間でもあつたなら、一生何の苦痛も知らずに過ぎれたらうものを。

正しいことと自由なことを慕う思想とは、いうまでもなく、「同じ人間でありながら、自分らばかり其様に輕蔑される道理がない」(一章一節)、「自分だつて他と同じやうな生きて居る権利がある」(三章六節)との認識である。しかしもし学問をしなかつたら、丑松が「人らしいもの」として生きていく欲望もなく、部落民であろう

がなかるうが、また身分を知られようが知られまいが、何の悩みも感じずにいられる、と右の節にはっきり見て取れる。これは他方から見ると、学問をしていないものがその正しいことと自由なことを認知しえないという意味を含んでいることも当然考えられる。この学問をしていないものは『破戒』では部落民を含む庶民大衆である。

部落民以外の人は部落民が下等人種として差別されるのが当然だと思ひ込み、部落民自身でさえ、そのほとんどは、あるいは飯山町離れの村に住むもののように甘んじて差別を受け、あるいは丑松の叔父のように「唯一族が無事でさへあれば好かつた」(十一章一節)と、ひたすら身分を隠そうとしている。『破戒』の冒頭に、金持の部落民大日向を病院や旅館から追い出そうとする民衆がいかに無教養な愚民のように描かれ、部落民が差別に對しほとんど無感覚であるのも、蓮太郎のいうように、「思想の世界といふものは、未だ僕らの仲間にかけて居ない」(九章二節)からである。即ち部落民及び部落民蔑視にどのような認識をもつのかは、部落民であろうがそうでないかに関係せず、教育の有無とそれによる近代的意識の有無が丑松のような知識人と庶民大衆とをば

きり分けてはなすのである。

藤村は、小諸在住中、一人の部落民出身の教育者の悲惨な運命を聞き伝えたことよって『破戒』執筆の動機を引き起した、とその回想文『破戒』の著者が見たる山国の新平民」(明治三十九年六月『文庫』、以下『山国の新平民』と略す)に記している。それによると、その教育者は単なる出身の理由で長野師範学校をやめなければならなくなり、その後も同じ理由で職を転々とし、最後にある中学校長になったとのことである。藤村はその教育者が「頭脳が確かで学問もあって、且つ人物としても勝れている」と聞き、「新平民として異数な人」と評し、後年も「私はあゝいふ無智な人達の中から生れて来た、さうしてそういふ中で人として眼醒めた青年の悲しみとでもいふものを深く心を引かれ」(『眼醒めたものの悲しみ』『読売新聞』大正十二年四月四日)たと述べている。ここには、智即ち教育の有無を基準にして教育者と他の大多数の部落民とを分けて見る藤村の姿が窺えるが、教育者の悲しみが部落民一般の悲しみと言わず、「人として眼醒めた青年の悲しみ」という表現を用いる藤村の考え方にも注意すべきである。教育者のような、教育を受

けた部落民であっても、教育を受けていない部落民であっても、彼らは同じく下等人種として差別を受け、同じくその差別のために苦しむというのが事実である。しかし大多数が無智、無欲である部落民のあいだにあって、教育者だけは不合理な扱いを辛抱強く忍耐しながらも、あくまで自分の学識を社会に活かし、個人の生活の願望と人間としての価値を確立させようとした。そこに生じた悲しみは、無欲な大部分の部落民がただ受動的に差別を受けるときの悲しみとは全く異質のもので、藤村の関心や彼のいった「眼醒めたものの悲しみ」の意味がまさにここにある。この点から考えると、この後の叙述によってさらに明らかになると思うが、藤村が丑松を部落民に設定したのは、それによって部落民全体の悲しみとそれをもたらず原因を正面から追求しようという目的にあったのではなく、差別現象によって代表されるような非近代的な社会の中において、また無教育、無智の状況下にいる庶民大衆に対して、ひとり目ざめた知識青年が周囲から理解を得られない孤独な者として、個人の生きていく権利を守るためにいかに苦しむのかを描き出そうという狙いがあったからと思われる。『破戒』には大日向

や蓮太郎、また小学生仙太が疎外され迫害される場面があるが、これらは、表現上では、当事者つまり迫害する側とされる側が主体として描かれておらず、丑松の見たもの感じたものとして記述され、丑松が民衆による社会的行為に不満と憤慨とを覚えながらそれに抵抗できないと痛感して感情を内面に抑え込んで苦しむというところに描写の重点が置かれていることは、上述の藤村の狙いを裏づけていよう。

三

前記部落民出身の教育者が偏見を受けながらもついに中学校長にもなったというのは、当時では決して容易なことではなかったであろう。その経歴から二つの面を考えることができる。一つは周囲からの抑圧に屈せず、社会進出を通じて自分の望みをかなえようという積極的精神を見ることである。その精神を更に発展させたところに、不合理を不合理として社会的に認識させない限り、一個人の権利も根本的に保障できないとの思いをもち、民衆の覚醒を喚起することによって因習と戦おうという蓮太郎の姿が現われたわけである。もう一つは、部落民

にとつて社会進出することには、それだけでも普通以上の不安や恐怖と苦悩が避けられないもので、その教育者が自分の内面に於いて秘そかに苦しみぬいたであろうという側面である。『破戒』に至っては、その人間内面の苦しみが丑松に昇華されている。もっともこの二つの面は藤村にとつて対等のものではなく、彼はそのどちらかあるいは両方とも重く見、そしてそれなりの人物を描き出しても不思議ではない。しかし現に蓮太郎という人物が設けられたものの、それが副次的なものにすぎず、丑松が主人公となつてその内面が見逃されないほど描かれていることは、藤村が上記二つの側面のうち、前者よりも後者の方により深い関心を寄せていたことを窺わせる。もちろんこれは、藤村の資質や生活的、感情的経験が彼をその悲しい側面に共感させやすいというところにも原因があると思えるが、『破戒』執筆当時の彼の差別問題や庶民に対する姿勢が、彼の問題の考え方、取り扱い方を左右していたことも考えるべきであろう。

前掲『山国の新平民』は、藤村が『破戒』執筆当時行った部落民に対する実地調査からの見聞をまとめたものである。もともとその調査は教育者に関する話を聞いた

ことによつて部落民に興味を感じたからであつたと藤村自身がいつているが、文章を見る限り、部落民自身のこと、つまりその歴史や風俗、産業などの紹介が大部分を占めているのに対し、部落民が日頃いかなる不公平な待遇を強いられているのかについて、教育者のこと以外にほとんど触れられていないし、部落民の社会的地位の向上を訴えようとの意思も全く見られない。つまり藤村の所謂部落民に対する興味は、恐らく『破戒』執筆のためにある程度部落民のことを知る必要があるとの思いによるものであり、部落民蔑視という問題を重視する立場からのもではなかつたことが十分考えられる。ここで当時藤村の部落民問題に対する姿勢を追求するつもりはない。しかし部落民全体としての悲惨な運命や差別という社会問題に対する関心の薄さは、国民の知的向上、社会の不合理現象を一日でも早く減らそうという責任が自分にもあるとの認識をもたなかつた藤村の姿勢を示しており、その姿勢が当然丑松にも反映され、結局丑松の悲劇的、宿命的性格につながっていくことは、丑松の人間像への把握に重要な意味をもっている。

丑松は部落民でありながら蓮太郎や家族以外に部落民

と接しない。それどころか、彼はいわゆる無智たる部落民に嫌悪感さえもっている。帰省中こういう部落民に出合った時、彼は「斯うして無智と零落とを知らずに居る穢多町の空気を呼吸するといふことは、可傷しいとも、恥かしいとも、腹立たしいとも、名のつけやうの無い思をさせ」て、「一時も早く是処を通過して了ひたいと考えた」(八章四節)のである。相手を「無智」であると見下して、丑松自らは社会的、感情的距離を部落民大衆との間に置いていることがここに示されているが、無教育、無智という面に於いては非部落民大衆も同一の立場に在ることを考えると、右記丑松の距離感是一般庶民に對するものともいえよう。『破戒』の冒頭に、丑松の下宿が「何となく世離れた、静寂な僧坊」であり、「それがまた小学教師といふ丑松の今日の境遇に映って、妙に侘しい感想を起させます」と、丑松の孤独がいち早く印象づけられているのは象徴的であるが、その理由を示すように、下記の場面が描かれている。

町々の軒は秋雨あがりの後の夕日に輝いて、人々が濡れた道路に群つて居た。中には立ちとどまつて丑松の通るところを眺めるもあり、何かひそひそ立話

をして居るものもある。『彼処へ行くのは、ありやあ何だ——む、教員か』と言つたやうな顔付をして、酷しい軽蔑の色を顕して居るものもあつた。是が自分らの預つて居る生徒の父兄であるかと考へると、淺猿しくもあり、腹立たしくもあり、遽に不愉快になつてすたすた歩き初めた。(一章二節)

足掛け三年も飯山の町に暮らしているとはいへ、丑松と町民たちとの関係がいかに疎遠であるか右から窺えよう。一見丑松が町民に軽蔑されているようであるが、しかし『破戒』全篇に庶民が教師という職業を軽蔑していることを示すものが一つもないのに対し、丑松こそが庶民と接する意思がなく、それに加え町民たちがつい先程部落民大日向を町から追い出したことが一層丑松に違和感を感じさせているはずであるので、丑松が町民から自分に対する軽蔑を感じ取ったというより、教育や認識上の差、またその差による日常生活に於けるそれぞれの関心事の違いから生じた丑松自身の町民に対する違和感と疎外感が彼を右のように感じさせたといえよう。

蓮太郎は部落民蔑視の現実と戦うだけでなく、一般下層社会の人々の労働状況、生活状況も研究し、庶民の教

育、生活の向上を訴えようとしている。丑松は蓮太郎を尊敬し、蓮太郎から感化を受けた、と『破戒』に書いて

あるが、その感化は単に差別の不合理を認知したというところにとどまり、国民に関心を寄せるといふ蓮太郎の態度、国民の知的生活的向上が不合理な社会現状の改善の根本である、という彼の思想の深層にあるものを丑松は全く受け止めていない。つまり社会現状に不満をもちながらもそれをいかにして改善させようかとの意欲がないため、結局、もともと社会に向けるはずの不満や主張が自己内面の葛藤と苦悩とに転化せざるを得なくなってしまうのである。蓮太郎の死から勇気を得たというものの、身分を告白してテキサスへ行ってしまふというのは、蓮太郎の真似を決してするまいという丑松の姿勢を最も端的に示すものといえよう。これは換言すれば、蓮太郎の真似をしないからこそ、彼は自分の精神の解放を日本という現実社会に於いてでなく、「理想的」な外国でしか求められないのである。もし彼が告白した後も日本にとどまろうとするのなら、社会状況が改善されない限り、またその改善をはかることが自分の責任でもあると認識して努力していこうとしない限り、すでに身分を知

られた一部落民として、その精神の解放は永遠に不可能であろう。

四

『破戒』の本質については、丑松の内面に於ける目ざめたものの悲しみを重要視するか、部落民への社会的偏見に対する抗議というものを重く受け止めるか、あるいは藤村個人に限って作品の意味を考えるべきか、などの見解がある。これらの見解や論述に於いては、部落民問題が丑松の人間像、あるいは作品全体に一体どういう意味をもつのかというところに注目が集中されている一方、小学校長や郡視学などの人物の設定やそれらの人物と丑松との関係のもつ意味を考える傾向が少いようである。

確かに、丑松が置かれている状況を見ると、校長らの人物や小学校という環境が部落民問題に比べて二次的なものに見られ、部落民であることによる丑松の悲しみも最も深刻に捉えられているのに違いないが、かといって校長らの人物のもつ意味を『破戒』の作品構成、丑松の性格把握の過程から完全に取り除くのはその妥当性が疑われる。『破戒』が、大日向迫害事件を目撃したのをき

かけとした部落民問題に於ける丑松の悲しみを、第一章を通してその最初の印象を讀者に与えているのにつづいて、その後すぐに、第二章をもって校長らの人物を持ち出し、校長らに支配される小学校に於ける丑松の境遇を描き出していることは興味深い。これは、教師丑松を取り巻く小学校、さらに教育界という環境が、部落民丑松を取り巻く部落民蔑視という環境とともにこれから丑松の人物描写に深くかかわっていくことを前もって示すものと考えられる。それを裏づけるように、校長が第二章のほかにも、第五章の三節、第十四章の一、三、四節、第二章の三、五、七節、そして第二章の四節と、頻りに登場しており、しかも登場する度に必ず丑松を排斥する立場を取り、丑松の辞職に直接つながっていくのである。このような人物配置と表現方法を見ると、校長らの人物設定が丑松の人間像の構成に重大な意味をもっていないとは考えにくい。

丑松は三年前、優秀な師範校卒業生として飯山小学校に就職することになった。彼は自分にとって「社会に突出される」(一章一節)最初の場であるこの小学校で、自分の理想と生活の願望をかかなる第一歩を踏み出そう

と思ったのに違いないが、しかし当初の思いと裏腹に、それ以来彼は「快活な性格を失つ」(三章一節)てしまひ、憂うつへの一途を辿って来た、同僚であり友人でもある銀之助がひしひし感じてきたし、彼自身でさえ、「ここ三年は、自分にとつて一生の変遷の始つた時代」(七章一節)と嘆いている。作品の構成から見ると、こういう憂うつが大日向迫害事件に始まる身分問題に於ける悲しみと別問題であることは明らかであるが、そうだとすれば、いったい何が彼にそういう憂うつをもたらしたのでらう。

左様なると、猶々我輩には解釈が付かなくなる。どうも我輩の時代に比べると、瀬川君などの考へて居ることは全く違ふやうだ。我輩の面白いと思ふことを、瀬川君などは一向話らないやうな顔をしてる。我輩の詰らないと思ふことを、反つて瀬川君などは非常に面白がつている。畢竟一緒に事業が出来ないといふは、時代が違ふからでせうか——新しい時代の人と、吾々とは、其様に思想が合はないものなのでせうか。(五章三節)

これは校長の話の一節である。校長にとって教育は即

ち規則であり、上司である郡視学の指示は即ち至上の命令である。学校運営に関しては、彼は「時計のやうに正確に」(二章一節)と要求し、いわゆる「軍隊風」に生徒たちを躰け、教職員を指揮するのが彼の主張である。

これはいわゆる「我輩の時代」の人が面白いと思うことであるが、その根底には、支配と服従を重んじ、人間尊厳と個人の自由を無視するという非近代的な価値観が存在していることはいうまでもない。もちろんこれは単なる校長個人の認識ではない。郡視学は校長と同様の立場から、「どうしてまた瀬川君は其様な思想を持つのだらう」(二章二節)と疑問をもち、町の代議士たちは、校長が「原則」と「命令」とを忠実に執行したため表彰の金牌を受けたことを「吾信州教育界の名譽」(二章一節)とと思っている。その金牌が校長のような教育者に与えられたことと自身が、個人の意志と関係なしに、絶対服従しか認めないことが教育界に於いて正当かつ支配的思想であることを意味するが、これを、「服従が社会秩序の維持や国家利益の擁護のための国民の責任と美德」を基本精神とする明治政府の教育勅語のもとに考えると、丑松が置かれている小学校がどういふものかは改めて述

べるまでもあるまい。

校長の姿勢に対し丑松が具体的に何を主張しているのかについて、客観的描写を通じて表現されなかったことは憾みに思われるが、校長が表彰の金牌を受け取ったことについて、丑松が「教育者が金牌などを貰つて鬼の首でも取つたやうに思ふのは大間違だ」といい、その金牌が「価値の無いもの」(二章二節)と評価しているところに、丑松が校長と全く反対の価値観をもっていることが示されていると見てよからう。つまりいかにして教育を行うか、それにあたってどのような人間関係を維持すべきかについて、虚色を飾り、規則や命令に無条件に服従すべきと主張する校長に対し、丑松は自己内面の真実、個人の意志を大事にするのが本当の価値のあるものと認識していることになる。しかし国家主義、強権政治をもとにした教育思想、教育運営体制の下で、丑松のもつような価値観は決して受けいれられるものではない。このため、丑松は「否でも応でも其間嚴重な規則に服従しなければならぬ」(十六章一節)ことを苦に思い、「到底今日の教育界は心ある青年の踏み留まるべきところでは無い」(十一章三節)という銀之助の話に共感をもちなが

らも、なおそこに留まらなければならぬことで、かつての快活な性格を失わざるを得ないのである。このような、一旦本格的に現実社会と接触するようになる、自分のもっていた人生への夢、個人の自由と権利への欲望がその現実によって抑圧され抹殺されてしまうことから生じた苦しみが、部落民問題に於ける悲しみとは状況的に違いながらそれと絡みあい、もう一つの側面から丑松の性格を構成させていることは、『破戒』の本質把握に見逃せない点であろう。

五

二葉亭四迷の『浮雲』では、文三は自分にとって人生の幸福の象徴であるお勢を「親よりも真理よりも」大切な存在と思っている。しかし内面の不具や生活に対する無力さにも原因があらうか、彼はあくまで自分に対して誠実でいようために、立身出世どころか、お勢さえ失おうとしている。それと反対に、無節操で順応型の本田昇は、出世に於いても恋に於いても文三に対して勝者の姿勢を取っている。官僚の腐敗、人間関係の險悪とそれに対する文三の正直が彼の失意と孤独につながるものであ

ることは多くの評論に指摘されるところであるが、同様な問題に於ける『破戒』の取り扱いが『浮雲』よりも注目されるべきであろうものの、それに与えられるべき評価がごく一部にしか見られないのは不思議に思われる。校長や郡視学、そして郡視学の甥にあたる勝野文平との三者がそれぞれの私欲のために癒着する場面が『破戒』にしばしば描かれ、それもまた、「賢いと言はれる教育者は、いづれも町会議員などに結托して、位置の堅固を計るのが普通だ」(二章一節)のように、社会一般にまでひろげられて批判されている。校長はいわゆる「学校の統一」のために常に丑松排斥の下心を抱いているが、彼にとっての学校の統一は、彼のような教育姿勢のもとでの認識の統一だけでなく、自分の権威と利益を維持する手段でもある。そこで、生徒間に於ける人望が校長よりも篤く、校長の意志に従順しない丑松は、自我を抑圧する教育思想、教育体制にとっても、私欲に満ち正義感のない校長個人にとっても疎外され排斥される対象にほかならない。『破戒』の最後に、自分を告白した丑松に対して多くの人々が同情を寄せ救いの手を差し伸べているのに対し、校長だけが徹底的に彼を締め出そうと

したところに、校長らの丑松に対する姿勢が最も端的に表現されているといえよう。

丑松は若くして師範学校を卒業し、小学校の首席教員の地位を占めている。彼も一青年としての立身出世の願望を抱えていたので、もし少しでも物事を円滑にはこびさえすれば、地方に於いては将来有望な、よりエリート的な存在になる可能性は十分あった。恋についても、お志保を愛し、また彼女に愛されることは、彼にとって青春の欲望や美しい人生の一部分であり、それは『浮雲』の文三の場合と同様である。しかし立身出世や愛にいかにか憧れていようとはいえ、そのために邪悪にしたがひ、人格まで失おうというのは決して丑松のできることはない。彼は、文平が出世のため下劣な振る舞いをするのことに對し、「正味自分の価値よりは其を二倍にも三倍にもして見せ」(十五章三節)る、と憎悪感をもち、上司である校長に對しても、校長にいわせると、「文平のやうに自分の意を迎へない。教員会のある度に克く意見が衝突する。何かにつけて邪魔になる」(二一章三節)との姿勢を取り、官僚社会の腐敗、人間性の歪みと對蹠的に、一知識青年の誠実さを示している。

こういう丑松を待つのは、立身出世に失敗し、社会と接する場所からさえ離脱しなければならなくなるのである。彼は身分を告白した後自ら辞表を提出した。もちろん丑松が自己主張をし、正直さをもって邪悪と虚偽とに對する限り、自ら辞職しなくても、結局小学校さらに教育界から排除されてしまふのに違ひなかつたが、学校を離れることを辞職で表現するのは、丑松のような知識人の、不合理と腐敗とに満ちた官僚社会に伍することのできない性格をより鮮明に示す効果をもっているように見られる。立身出世の念願を捨て、支配と服従の人間関係で構築されている現実との一切の係累を振り切つて、せめて自分だけの天地、つまり個人の精神の自由を保とうとした選択は、身分を告白するという表現に巧みに結び付けられ、丑松のような知識人の人生に於ける一つの必然の結果を示したのである。

(1) 身分を告白した丑松に多くの同情が寄せられているとの描写は、やや不自然で、部落民への差別観が庶民の間に定着しているという作品の一つの趣旨から乖離している感じを与える。これは藤村自身の主人公に對する同情によるものと考えられるが、對照的に校長らだけにこういった同情が託されていないことは、藤村の意図から言つても、

作品に於いても校長らと丑松との関係のもつ意味を一層鮮明にしているといえよう。

(2) 校長らが部落民であることを口実に、日頃の丑松排斥の企みを果そうとして、転職でなく、免職にしようと、丑松が辞表を提出する前にすでに決めておけることは、二二章五節に書かれている。

六

以下に述べることは、日本近代史、近代文学史研究に於いてよく取り上げられる問題であるが、この小稿をより完全な形にするために、拙いものであるが、結びとして簡単に述べておこう。

かつて北村透谷が自由民権運動に携わり、また自らそれを離脱し、文章をもって人間の改造に志したが、最後に「内部生命」というものを追求するようになったことは周知の通りである。自由民権運動への参加は透谷の国家や社会を思う姿勢を示したものであるが、運動からの離脱は運動の暴力化反対や国民の「不具」に対する失望感によるものとされている。その後、国家体制や社会の不合理現象に対する批判を文章による国民啓蒙、人間改造に移したものの、それが結局彼自身の精神の内部に向

けてのみ処理され、自分自身に解き難い苦しみとむなしさをもたらしただけになってしまったといわれている。

日本の明治維新は、フランスのような、近代的市民社会が成熟し、発達したうえでの社会変革でなかったため、維新後も、さまざまな因習が革命と無関係に社会全般に温存されていた。一方、明治政府は富国強兵をもって欧米列強に対抗しようとするため、民利、民権を犠牲にした天皇中心、国家絶対主義を定着させ、本当の近代民主主義国家への道を選ばなかった。「近代」というものにふさわしくないこうした現実の両側面を『破戒』が部落民問題と小学校長らの人間像をもって描き出していることは、近代文学の一つの要と思われる現実暴露、現実批判の精神をある程度備えているといえよう。

激しい社会変革の波に乗って、多くの知識人が近代的な自我意識に目ざめながら、国家や社会に対する自らの責任を感じ、政治に志し、社会活動に身を投じたことは、改めて述べる必要もあるまい。福沢諭吉の『学問のすゝめ』などの著述を含め、透谷、兆民など数多くの知識人の活動には、国民啓蒙、政府批判によって国家と国民をより理想的社会へ導こうとした偉大な努力が見られる。

しかし国民が決して短期間で自分たちについて行けるようになる状況ではないとわかり、政府批判や社会運動も

厳しい弾圧を受けたため、一部の知識人は政治に絶望し、社会に背を向け、国民、国家を思うより、まず自分自身のことを考えようという傾向に転じたのである。自立し、自我發揮ができると思われる文学への道に志をかえたのはその一つの選択であろう。透谷も藤村も花袋もそうであったが、『破戒』に於いて、主人公が丑松に先輩として尊敬される蓮太郎でなく丑松であったのも、そういう明治知識人に於ける歴史的变化が藤村の筆を通して自然に現われたものと考えても差し支えないだろう。勿論個的「私」がそれ自身の自由と価値を主張し、自分に誠実でいようとの姿勢は、個の目ざめの発展と深化を表すものとも考えられるが、他方からいえば、人間そのものや自己の内面を追求するにつれて、次第に現実から離れた内向性や閉鎖性をもたらし、自分自らを社会的、生活的に弱いものにして苦悶と孤独の宿命的状态に追い込むという消極的結果を生んでしまったのである。透谷の自殺は、病気や経済的困窮にも原因があったのだろうが、人間の内面を見つめつづけることが、自分を苦しめつづ

けることとなり、結局出口が見つからず堪えられなくなったことがその深層にあったと考えられよう。

藤村筆下の丑松は、透谷と違って告白によって精神の解放を獲得したとある。しかしこの解放はどういうものであったのであろう。吉田精一氏は「島崎藤村・『破戒』の出現」(桜楓社版『吉田精一著作集・六』昭和五六年七月刊)に於いて、「主人公の解放と更生は、社会的それではなく、或はそれを主とせず、精神的な解放と更生を意味する。即ち社会問題の解決を意図せずして、既存の秩序、条件下での個人の精神の救済を作者は考えたのである」と鋭く指摘している。精神の解放を現状打破というところに求めず、現実を離れた形で個人の相対的自由のみを求めようという丑松の姿勢が、彼の辞職やテキサス行きというような撰択に極端に現われているといえよう。部落民であっても、部落民を蔑視する日本の庶民社会を離れたら、普通の人間としての尊厳を保つことができる。また立身出世や社会人としての他人との付き合いを諦めるのならば、国から課される絶対服従の義務を果さなくても済む。しかしまさに吉田氏の指摘するように、これはあくまで藤村が丑松の精神の救済をはか

ったものであり、現実的にこのような救済で真の精神の解放が可能であつたらうか。

恋も捨てた、名も捨てた——あゝ、多くの青年が寢食を忘れる程にあこがれている世間の歓楽、それも穢多の身には何の用があらう。一新平民——先輩が其だ——自分も亦た其で沢山だ。斯う考へると同時に、熱い涙は若々しい頬を伝って絶間もなく流れ落ちる。(二十章四節)

丑松が社会的手段をもって精神の解放を勝ち取ろうとしなかつたためどれほどの代償を払つたかは、彼が告白まで堪えつづけてきた内面の苦痛と葛藤とですでに示されていた。またその精神の解放が社会的でないため、自分を告白してもその苦痛と葛藤がそれによって終つたわけでは決してない。「一新平民——其で沢山だ」のところに、個人の精神の自由さえ保障できれば、他の一切を惜しむまいとの意味が読み取れるが、しかしなぜ彼は「斯う考へると同時に、熱い涙は若々しい頬を伝って絶間もなく流れ落ち」なければならぬのだろう。日頃憧れていた恋と名とを自ら捨てるのがどれほどの悲しみを伴つたものかはもちろん、せめて自分の精神的世界だ

けでも保つて行こうとすることには、かりにそれが可能だとしても、社会から離れた人間としての寂しさがこれから余儀なくされていくという予想による悲しみさえも、右からはひしひし感じ取れるのではなからうか。丑松にはテキサス行きという理想的しかし架空的と思われる終局を与えられているが、もしより自然に、つまり彼が告白後もなお日本に留まろうとしたのなら、一体何が彼を待っていたのだろう。『破戒』の後に発表された『春』や『家』、又数多くの自然主義及び他の作品がその結論を示していよう。

明治時代に於ける日本人の近代意識、とりわけ知識人の個の目ざめは、日本という土壌から生じたものというより、むしろ流れ込んできた先進国の民主主義思想に触発されて発生したものといえよう。このような目ざめは最初から歴史的、社会的基盤が脆く、不安定なものがあつたうえ、国家や社会からの抑圧もいかにも重いものであつたため、個我的追求はその過程中にさまざまな屈折を見せなければならなかつたのである。丑松が不合理な現実には不満をもちながらも、それを強く外部へ押し出すことができず、又日本でなく外国でしか精神の解放を求

められないというのもその屈折の現われであろう。そこに見られる知識人の限界は、明治という特定の時代がもたらしたものであると同時に、社会全般より一歩先に目ざめた知識人の歴史的品格と、悲劇的、宿命的人生の所以を示したものである。

付記 『破戒』に関して何かを書こうとの試みは、梅谷先生に教えていただいた頃にも数回行ったが、学問上些かの甘

さも許さない先生の前に、「いい加減なものだ」と吐られるのが決まりであった。今回も先生に断ることなく、相変らずいい加減なこの小稿を載せていただくことにしたが、事後、たとえお会いすることができなくても、きっと先生の厳しい批判の声がどこかで響くだろうと覚悟している。つまり覚悟のうえでこの記念号を借りて先生に敬意を表し、数年のご指導とご親切に御礼申し上げる次第である。

(一橋大学大学院博士課程)